校歌物語

―青年校長と西條八十―

柴山希一

下館第一高等学校校歌

1番　筑波の西に緑野あり／鬼怒の流れに濯われて
花かぐわしく咲くところ／聳えて高し我が母校

2番　武器より富に移りゆく／列強戦の只中に
若き日本を負いて立つ／我らに重き使命あり

3番　高き理想を追う者の／行くは正義の大路のみ
われらがここに学びたる／教えは永久の旗じるし

4番　いざや進まん健児等よ／　わが愛国の赤誠は
図南の翼の一搏(うち)に／　遠く翔(かけ)らん五大洲

新2番　叡智の森は深けれど／こころを協せ究めゆく
若き希望の灯に／想いは楽し身はつよし

新4番　使命に燃ゆる眉あげて／われらは進むたゆみなく
光栄えある文化日本を／世界が仰ぐその日まで

校歌物語（青年校長と西條八十）

下館と西條八十を繋いだ外池格次郎

下館第一高等学校校歌の作詞者である西條八十は下館に住んでいたことがある。

昭和十九年一月から昭和二十二年四月まで、早稲田大学英文科の同級生だった外池格次郎（のち父の達之助を襲名）が下館町長になっていたのを頼って疎開していたのである。外池に紹介され住んだ家は、外池家に近く大町の繊維卸業の間々田元吉氏所有の別荘であった。この家は造りもよく、東京などを焼け出された八十夫婦の親族たちが身を寄せた時など大いに役に立った。

外池は八十が学生時代所属したアカデミックな文学雑誌『假面（かめん）』の同人でもあった。同誌に小説を書き、「文の外池、詩の西條」と謳われた文才の持ち主でもあった。

外池は旧制下妻中学（現・下妻一高）の校歌の共同の作詞者でもある。教師に勧められ外池が五年生の時に、級友の菊地暁男と合作し、有名な「文庫」派の詩人で真壁郡横根村（現下妻市横根）に住んでいた横瀬夜雨に添削してもらったものである。旧制一高寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』のメロディーを借用して、最初は生徒の間だけで歌われていたが、後に正式の校歌となった。

以下、割愛